

唐丹の民話・20話「大石地区」



(参考) — 先生と教え子たちの絆 — (資料)

平成20年7月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目次

—青嶋峠のジンジョサマ—

唐丹民話の再話著作にあたって、および原文	2
I. 大石浜評	4
II. 地名の由来譚 ^{たん}	4
1. 大石について	4
2. 青嶋について	5
III. 青嶋峠の道標・(物語本文)	5
IV. 希望と不安を胸に抱き	7
V. 通学は、モーターで	8
VI. 風が悪いと「おがまり」	8
VII. あっだ！こっちだ！どっちだ！	10
VIII. 『ジンジョサマ』に感謝して	10
IX. 漁火に思いをはせて	11
X. 気は優しく力持ち・(物語おわり)	12
XI. 先生と教え子たちの絆(参考資料・再話著者所感)	13
1. 学校創立は、早かった大石	14
2. 自然環境と善き先生方に恵まれて	14
(1) 環 良伯先生	14
(2) 菊池武毅先生	14
その1. 「奮いや大石健男児」	14
その2. 「大正2年大火の鎮火祈願歌」	15
(3) 菅野嘉七先生	16
「思い出を語る」	17
その1. 新沼ハルさん(旧姓石本)	17
その2. 上野クニさん(旧姓石本)	18
(4) 大石小学校修学旅行歌：作詞・古池タケオ	19
(5) 大石賛歌：作詞・林野民三郎	20
XII. 豪商「わかた」	22
民話再話関係者	25

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただき、この中から、唐丹に関係し、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら再話著作しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いです。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この民話の「青嶋岬のジンジョサマ」は、釜石民話第5集「大石の青島のお地蔵さん」を再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

此のお地蔵さんは大石部落に行く途中の青島と言う所の県道の右側にあります。

お地蔵さんと言っても卵形の長丸い石なのです。昔は旧道が大石側の岬より下がり県道に出る途中に有り歩く人々の道標だったと言います。

青島は大石の魚加工業「わかだ」の全盛時代に入出入りする人々あるいは荷を運ぶ人々など多くの人達が利用した大事な沿岸道路でした。

現在の県道が出来てからもお地蔵さんのおいでになる道を好んで歩く人が多くて、60年昔、私の小学校は大石小学校で高等科になりますと大石から小白浜まで15分で着く船で2年間通学しました。

天気がよくても海が荒れている時は朝早く家を出て皆誘い合って山道を歩きます。其のことを「おかまわり」と言ったものです。急いでも2時間タツプリかかって学校に着きます。

学校が終わると皆におくれないように一緒に帰るのですが荒川部落を過ぎると旧道を登る道があり、その近くに来ると皆立ち止まって誰言うもなく「どっち行くが一」あっちがいいこっちがいいとにぎやかでしたが、だれからともな

く「早く家に行きたいから旧道をいくべえ」と皆夕暮れ近くは家がこいしくて、たちまち旧道の近道にきまり峠に登る細道を歩き始めます。

峠の頂上に着きますとポツポツと家も見えてきて皆安心してワイワイガヤガヤとにぎやかに坂道をかけ下ります。前の子供が「ジンジョサマに着いたぞおー」と後の方に呼びかけて皆一緒にお地藏さんを拝んで帰ったものです。

それから何年がすぎて私の父が旧道を誰も通らなくなると、お地藏さんが淋しくなるだろうと自分の背中にしょって現在の所にはこんだのです。

今でも私も大石に行くとき車の中から小声でお地藏さんに呼びかけて拝んでいきます。よく見ますとお地藏さんに色々な布で作った頭巾風のもの、前かけ肩掛け風のもので通る人々に着せられているのでうれしくなります。そして父のことを思い出して懐かしんでおります。

皆様も大石に行く事がありましたら、どうぞ青島のお地藏さんを拝んでください。

では、これまで

父の名は、上野傳三郎（屋号＝向^{むかい}・通称：むげえ）です。

木村ナカ（旧姓上野）

【おことわり】

物語の全体感をつかむため、「1. 大石濱評と」「2. 地名の由来譚」を挿入。物語の本文は、「3. 青嶋峠の道標」からになります。

さらに、「1 1. 先生と教え子たちの絆」と「1 2. 豪商・わかた」の項を加えて、微力ながら大石の教育の熱心さと団結力、活気ある往時を偲べる風土記的な冊子にしました。

再話著者

青嶋岬の「ジンジョサマ」

I. 大石浜評

大石は、昔でいう気仙郡奥四ヶ浜（綾里、越喜来、吉浜、唐丹・村）の一つ唐丹村の最南端に在ります。

唐丹湾の背に、篠倉山（569m）、大角山（466m）、板木山（482m）などの稜線が起伏する北上山地に、時がにじむ原風景をとどめ。右手に嫁ヶ崎、左手に松磯、権現鼻をひかえた、空気感の好さと四季おりおりの雄大な景観が眺望されるところです。



（唐丹湾と北上山地を大石からの眺望）

一方、昔の大石の人々の暮らしは、「わかた」や「下方」、「丸一」、「長谷川」などの船主や魚の加工場を営む人が多くいました。

明治の頃の話では、唐丹の鯉船 15 艘の内 7 艘が大石の人のもち船で、商人や出稼ぎに旅の人も多く出入するなど、近隣にきこえた評判の好いにぎわいのある浜といわれました。

II. 地名の由来譚

1. 大石について

東北一帯がアイヌ人の国であったということから、大石の地名の由来を先住民族のアイヌ語からみる説もあるようです。

また、大石地区には、大石遺跡。屋形には、屋形、ヨサシリ、二股沢、明待場などの多くの遺跡があります。

先住民のみなさんも住みやすかったのではないかと思います。



（片岸川にも飛来した白鳥）

ここでは、夢がある話を古老の語りで述べると、「むがし、むがし五葉山の彼方から、大きな白い鳥が飛んできて、大石浜に羽を休めだど。



(現在の飛石)

ところが、食べ物もいっぺえあるし、見晴らしもいいし、居心地よくなって、ついつい長くいでしまったんだど。

そして、^{どっぼら}胴腹が『一番飛石』に、羽が『二番飛石』と『三番飛石』という、三つの石になってしまったど。

これをひっくるめで『飛石』と^よ呼ばったんだそうだ。

これがまた、大きな石だったので『大石』の地名になったというごどだ。そして、今も『飛石』は大石の象徴になっているんだよ……。

残念だが、『三番飛石』は、堤防を設ける時にとっばられ、今はないがねえ」……と。(古老=忠さんこと、上野忠三郎さん)

2. 青嶋について

青嶋にも、青嶋遺跡があります。先住民たちも、松磯の四季おりおりの風景を眺めながら暮らしたものと思います。

この青嶋の由来は、先住民族のアイヌ語からみるとアイ・オシュマ・イが訛って、アオシマとなったといわれ。

アイは矢、オシュマは落ちた、イは、所の意で、「矢の落ちた所」という説があるそうです。



(松磯の秋景)

III. 青嶋峠の追分碑



(青嶋峠のジンジョサマ)

このような素晴らしい、自然のたたずまいの一角に青嶋峠があります。

いつの頃からか、この峠の大石がわの左脇に、ジンジョサマ（地蔵様）が、建てられていました。

卵形の石に 地蔵尊と“右は山道”“左は大石湊”と刻まれたこのジンジョサマは、大石に出入する道行く人たちの“道標”となり、心のよりどころにもなっていました。

大石の人たちは勿論のこと、大石の豪商「わかた」の全盛時代には、陸路、大石に出入する人たちにも、大変助かった峠道だったと思います。

(『わかた』については後述)

この峠は、大石峠から千歳^{せんざい}方面、大石から荒川方面や濱街道などをつなぐ生活や文化交流の、唯一のだいじな道でした。

時代は進み、盛と釜石間の道路が県道に格上。大正15年(1925)から自動車道に改修工事がはじまり、荒川の工区がおわれれば、昭和8年3月頃には、全区間の県道が開通する予定になっていました。

ところが、その3月3日の桃の節句に大津波が襲来、本郷が壊滅状態に。



(昭和8年3月3日三陸大津波による壊滅状態の本郷)

その本郷の被害は、人口613人中、死者行方不明326人。家が102戸中、101戸がながされ悲惨でした。本郷で一軒残った宿^{しゆく}(屋号)の新沼丈之助さん親子が協力して、多くの人を助け面倒を看たそうです。

唐丹の死者行方不明は、人口3,694人中、359人。大石の被害は、船や小舟は流され、海岸ぶちにあった「わかた」の納屋が浸水しただけで、幸い死者などはありませんでした。

三陸沿岸はじめ唐丹は、大変大きな被害をうけたものだと子供心に感じていました。

このことにより、本郷では、県が宅地造成地を高台に指定し、完成した道路を変更。新たに道路を造ったため、全区間が完成したのは、昭和8年7月頃でした。

それから、青嶋峠は、旧道と呼ばれるようになってしまいました。が、それでも、多くの人たちが通っていました。



(県道青嶋橋の刻銘)



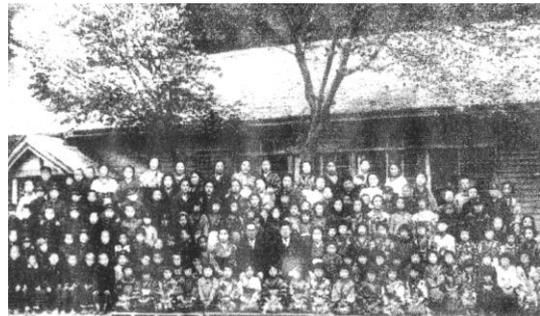
(県道青嶋橋・昭和八年三月竣工の刻銘)

IV. 希望と不安を胸に抱き

さて、私は、昭和11年度の卒業生で、同級生も24人と多く大石小学校創立以来1番。在校生も94人で8番目に多い、にぎやかな時代でした。

そのときの校長先生は、二度目に来た菅野嘉七先生で、「きびしさの中にもやさしく熱心に」教えられました。

昔、卒業する学年は、明治41年4月から5年生で、明治42年4月からは6年生までにのびたそうです。



(当時の大石小学校)



(当時の小白浜尋常高等小学校)

その後、すぐの5月10日から、小白浜尋常小学校に修業2年限の高等科が併設。校名が小白浜尋常高等小学校となり、2年間長く勉強ができるようになりました。

しかし、大石小学校には、高等科はできなかったのので、大石の子供たちは、小白浜の学校に通わね

ばなりません。

私たちは、1級上の人たちに教えられながら、希望と不安を胸に抱きながら、小白浜の学校に通学。1年後には、上級生となり、下級生たちの面倒をみながら通いました。

V. 通学は、モーターで

小白浜の学校に通うのは、モーターで（モーター=発動機船）15分位はかかります。出発の時は来ると、船が出るぞおーと、

「ポオー、ポオー、ポオー〜ッ」

「ポオー、ポオー、ポオー〜ッ」

とモーターの人が、合図のラッパを吹き鳴らします。

早く来て船に乗っている人、遅れまいと坂道を駆け下り船にのり込む人とさまざまでした。

そして、伝河岸での船の乗り降りは、大変でした。押せ波や引け波にあわせなければ、海に落ちたり、船と岩にはさまれたりする恐れがあるからです。

「それ早ぐ、乗れ、乗れ！」の

「今だ、いまだ！ それ、それ、それ乗れ、それ乗れ！」だの

「危ぶねえ！あぶねえ！少し、まってろっでば！」などとみんなで、声をかけあい、手をさしのべあって乗り降りしたものです。



定刻になると、船の発動機は、「ダン、ダン、ダン、ダン、ダン、ダン〜〜〜」と調子を上げ、機械の音も高らかに、伝河岸を離れ一路小白浜へ舵をとります。

いつもの朝の一こまで、風情がありましたねえ……。

(←飛石に係留の白鷗丸)

(昭和45年4月モーターは、あおしま丸を最後に廃止、バス通学に変更になる)

VI. 嵐なぎが悪いと「おがまり」

嵐のときだけ嵐が悪くなるとは限りません。空が晴れていても、嵐が悪くなることがあります。

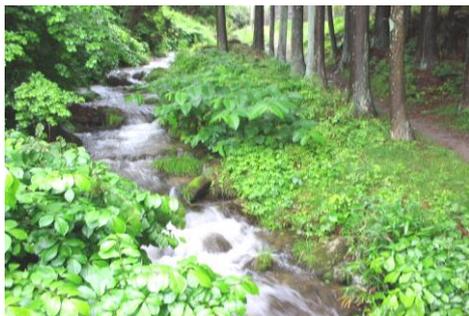
嵐が悪く時化しけになると、モーターが休みになります。

そんなときは、学校生徒は、朝早く家を出て、みんなを呼び（誘い）あつて、学校に遅れないように、陸路おかみちを歩いて学校に行きます。急いで歩いても、タツプリと2時間はかかりました。



(大石～小白浜の道路地図)

そのころの通る道は、大石からいうと、丸一の上の道～藤の川橋～金比羅さま下～青嶋～青嶋岬（又は、県道）～荒川の田んぼのあぜ道～熊野神社下～熊ノ木峠（又は、新道峠）～片岸～鶴来～小白浜でした。



(藤の川下流)



(金比羅様)



(しける大石漁港周辺)



(新道峠荒川側登り口)

このことを「おがまり」・(おかまわり・^{おかみち}陸路を歩くこと) といいます。朝方、うねりが来てモーターの休みが、遅く決ると遅刻することもありました。雨や風の中を歩くことも多く、「おがまり」は、とに角、大変なものでした。

VII. あっちだ！こっちだ！どっちだ！と

学校が終るころまでに、海が凧ないと帰りも「おがまり」です。みんな一緒になって帰るため、校庭に集まってから歩き始めます。



(青嶋峠荒川側登り口)

荒川部落を一寸過ぎると青嶋峠の登り口があります。この頃は、この道を旧道とっていました。

それは、前にも述べましたが、昭和8年9月に盛と釜石の間に、新しく県道が開通したからです。

その登り口の近くになると、みんなが立ち止まり、誰からとなく、「どっち行くがあー」と声がかかります。

それぞれが、あっちだ、こっちだ、どっちでもいい、とガヤガヤやっています。

「モサモサしてっつと、おいで行くぞお！」

「あー、なんだあーやんたぜえ」

「意地悪すんなあ」

「あー、ガイだ、ガイだ。かんにしろやあ」などのにぎやかです。が、夕暮れ近くになると、みんな家が恋しくなるんです。

誰かが、

「おら、早ぐ家さ行きでえがら、旧道行く」と言うと。

「うんだ、うんだあ、旧道いぐべえ」

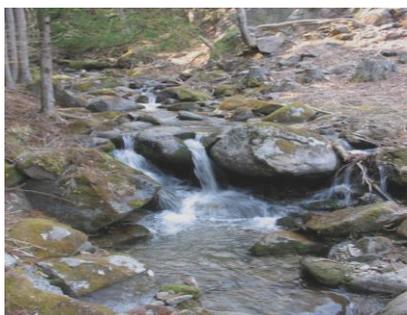
「そんだ、そんだあ、旧道いぐべし」

とたちまち旧道に行くことにきまり、三々五々連れ立って峠の細道を歩き始めます。



(荒川側峠道の途中)

VIII. 「ジンジョサマ」に感謝して



(青嶋川のせせらぎ)

しばらくの間、上り坂を黙々と歩き、峠の頂上に着くとひと安心。学校でのできごとや家に帰ってやることの話で、一転、賑やかになり、青嶋川のせせらぎに目もくれず、坂道を駆け下ります。しばらく下りると前の子が、「ジンジョサマに着いたぞおー」と後の方に呼びかけ、後の人たちを待ちます。

そして、「ジンジョサマ」に、今日の無事を感謝して、一緒に拝んで帰ったものです。

IX. 漁火に思いをさせて

秋のするめ釣りの時期になると、夕暮れも早く。天空には月や星も出。峠から、するめ釣りの灯りが見える頃に学校から帰ることもありました。

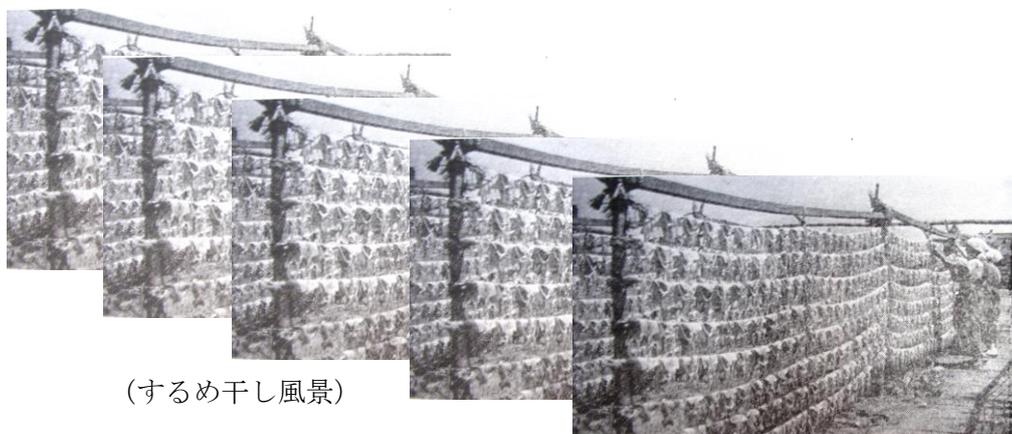
「父さんたち、なんぼか、釣ったべえがや……」。とか。小舟で漕いで行くのが主だったから……。

「一杯釣って、無事で帰ってくるように」。とか。 (峠ジンジョサマ)

「ほんでも、一杯釣ってあしたの朝、“するめ割り”や“するめ干し”の手伝いだな……」
なんて思ったりしながら歩いたものです。



(天空のまばたく星が海に降り立ったような漁火)



(するめ干し風景)

X. 気は優しく力持ち

やがて時はながれ、青嶋峠を通る人が、めっきりと少なくなりました。

このことを、心配して、おらいの父さんが、いつも語っていました。

「旧道、誰もとんねえば『ジンジョサマ』寂しくなるべえな」

「草は、ぼうぼうおえるべし、かわいそうだがら下にさげて、今までどおり、みんなに、拝んで貰いたいもんだ……」って。

さらに、世代もかわり、ジンジョサマもいつしか忘れられ、草深くうずもれ、父さんの思いが本当になったようでした。



(重い石のジンジョサマを背負って、峠の上から
何回も休み、やすみ、苦勞して下げた想像図)

そして、「ある時、父さんが、『ジンジョサマ』を背中に背負って、峠の登り口まで運び、今の所に納めたんだでば」。

「おらいの父さん、優しくかったからねんす……」。

『ジンジョサマ』は、昔のように、今も道行く人たちを見づめていると思っ
ていんのす」。

「あれから何年過ぎたべが……。私も大石への行き帰りは、車に乗せられるが、心の中で『ジンジョサマ』に呼びかけ、手を合わせていんのす」。



『ジンジョサマ』に、色々な布が、供えられているのを見つと嬉しくなり、やさしかった父さんのことや子供のころ思い出して、懐かしんでいんのす……」。

「みなさんも、大石に行くごどがあったら、どうぞ『ジンジョサマ』拝んでけらっせん」。

(峠下で人々を見守るジンジョサマ)

(参考) 石碑の裏面には、年代不詳ですが「善吉母」「長三郎母」「惣右門母」の刻名あります。(釜石市教育委員会所蔵拓本より)

どんどはれ

XI. 先生と教え子たちの絆（参考資料）

大石は、唐丹の中でも特に教育熱心な善き先生方に恵まれ、かつ部落（今の町内）の人たちの団結力も強い所と感じていました。

そして、地域民と先生、先生と教え子の絆が実証として、歌や言伝えなどで残されているものもあります。

これらを埋もれさせることなく、できる限り多くの方々の目にとどめる機会を与えたいと想い。拙い、この「唐丹の民話」の再話著作の中にも、参考資料として、改めて、織り込ませていただきました。

（再話著者所感）

1. 学校創立は、早かった大石

明治5年8月学制が発布され、明治政府は学区制による学校設立の基本計画をたてました。

釜石地方においても、明治6年より当時の村々に、学校の設立をすすめました。その内、明治6年に創立されたのは、唐丹（本郷）小学校、小白浜小学校、“大石小学校”、釜石小学校の4校でした。

唐丹は、藩政時代において、すでに佐々木善兵衛（医者・子弟の教育者）、葛西昌丕（天文・地理・国文学者・書家）などの学識者を輩出しています。

そして、佐々木文郷（医者・子弟の教育者）、久子翠峰（元江戸役人・学者・歌人）などの学者の奇遇（他人の家に一時世話になること）、薫陶（優れた人格で感化し、立派な人間をつくること）の影響を受け、明治の学制がしかれるまでに、寺子屋教育が盛んに行われたことが、大きな要因の一つにあげられています。



（佐々木先生の墓碑）



（葛西昌丕作星座石）



（久子翠峰作昌丕遺愛碑・左側）

2. 自然環境や善き先生方にも恵まれて

(1) 環良伯先生

大石の「環良伯」というお医者さんが、明治の学制発布前の寺子屋時代から、仕事のかたわらに、子供たちへ学問を教えたと伝えられています。

(2) 菊池武毅校長先生

先生は、明治45年4月から大正12年3月まで12年間勤めました。その間に「奮いや大石健男児」の作詞を手懸け、青年や学童達に希望を与え。大正2年4月の唐丹の大火の時は、大石部落や人々の状況や動向を「大火鎮火祈願鎮魂歌」として、知らせめ団結心を強め、かつ、後世に残し教訓にもなるようになされています。



大正10年度 卒業生

(菊池校長先生?・前列中央)

その1. 「ふるさと大石健男児」

① 磯浜続き六十戸 男女の数は五百人 奥四ヶ浜の北端の

誉れは高さ大石区

② 小手をかざして眺むれば 山は頂上峰高く 海は渺茫^{びょうぼう}かぎりなし

奮いや大石健男児



(大石よりの眺望)

③ 死骨の海の底広く 魚貝さまざま海草の 無限の富を蔵したり

奮いや大石男健児

④ 笹畑山の谷深く 森林うっそう天をつき なおも未墾の耕地あり

奮いや大石男健児 奮いや大石男健児

【奮いや大石健男児の歌を記憶していた人たち】

※1 三陸沿岸屈指の漁港として栄えた往時を偲び、今後の大石部落の団結と発展を祈念して記憶をたどり記す。

昭和4年度卒・三浦一郎 昭和49年3月(唐丹小史引用)

※2 この歌詞は、大正3年度卒・昭和63年85歳の朴澤フジノさん(旧姓・後川?)が覚えていたものです。

(大石松寿会・学芸会出演種目資料引用)

その2. 「大正2年大火の鎮火祈願歌」

① 大正2年春4月 1日午前の10時ごろ 青島台に火の煙 のぼると見えし そのうちに

② ふきまく風にあおられて かなたにこなたに燃え移る すわ事ここに起これりと 警世響く60戸



(山火事の想像図)

③ 駆けつくものは 僅かにて 腰はあずさの(梓・かばの木科の落葉高木。昔この木は弓の材料。ここでは、弓のように腰が曲がったという意味) 老人か 肩上げ着物の子ぐらいと 乳のみ子守^{もり}する婦人のみ

④ 力と頼む丈夫らは 明けのカラスともろともに 沖合い遠く漁労にと出でて一人もあらざりき

⑤ ますます荒^{すさ}ぶ暴風に 悪魔のごときぜつ煙は 数十町歩を時の間に燃え尽くして 今ははや

⑥ 音すざましく 笹畑の山を のまんず形勢に ふせがん術^{すべ}も尽き果てて 煙の風におわれつつ



(笹畑山周辺の遠景)

- ⑦ 逃れ来たりし一団の 老幼婦女は寄り集い 金比羅堂にぬかずきて
ただひたすらに 壯夫らの 帰帆の程を 待ちわびぬ



(金比羅様)

- ⑧ 神の知らせか あらざるか
根崎に見える黒煙は 丸一印の
発動機
- ⑨ 狂喜の涙 とめあはず 声張り上
げて とくとくと 呼ばれば
おーと いらいして
河岸に着きしや壯夫らは
- ⑩ 息おもつかず まっしぐら かけ
声高く かけのぼる つづく下形
川久保^ほやわかたの船も 帰り来る

- ⑪ 十数名の隣村の 応援人夫も駆けつけて 共に防火に努めしは 時こ
れ午後の三時ごろ
- ⑫ お寺の山に 飛び火して 三面猛火につつまれむ 防御の無精改めて
老幼婦女は 家の保護
- ⑬ 旦那といわれる人々は 気を八方に配りつつ もっぱら指揮の任をとる
血気盛んな 青年は
- ⑭ ゆうげき隊を組織して 飛鳥の如くあれまわり 阿修羅の如く駆けめぐ
り 危険の場所にうちあたる
- ⑮ かくてそれぞれ その任務 極力つくし そのうちに 日も早やすで
に暮れ果てて 阿鼻叫喚^{あびきょうかん}の戦争は
- ⑯ そう 一層に加わりぬ かなたを消せば 又こなた 力の限り尽くせ
しは よく日午前の3時ごろ
- ⑰ 唐丹全村全滅の この大火にも 大石の部落の人家を 安全に保ちし
ものは これやこれ (完)

大石小学校百周年記念時復刻・大石老人クラブのみなさん

(3) 菅野嘉七校長先生

菅野先生は、大正15年6月から昭和6年3月までと昭和10年4月から同年17年3月まで2回。通算12年の間大石小学校校長として勤めました。「教育熱心で、厳格な人」と言われ、児童は勿論のこと地域の青年等にも熱心に教育指導をされ尊敬されました。

大石をこよなく愛し、「飛び石」を見て詠んだともものとみられる歌も残しています。

人こころ高く 固きにならいとや

渚にたてる大いなる石

と。平成4年11月22日、教え子たちが、「飛び石」を望むことができる渚の近くに、この歌碑を建立しました。



(わずかに原形をとどめるでん河岸)

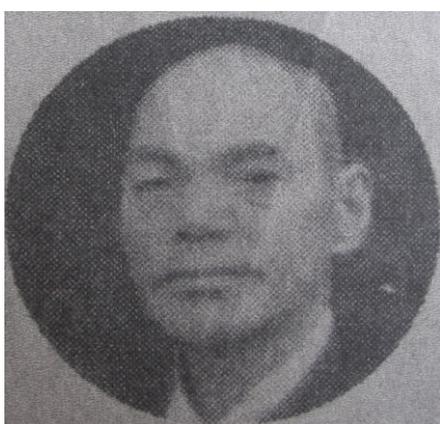
(3) - 1 思い出を語る人たち

その1. 新沼ハルさん (大正14年度・大石小学校卒業／旧姓・石本)

平成20年7月95歳・再話著者の母

私は、最初の赴任の時に、補習科で教えられました。いろいろなことを知っていて、厳しく教えられたと覚えています。それが後で役に立っただと大変感謝しています。

- ① 菅野先生が最初に来た時は、奥さんも裁縫の先生として一緒に、休み時間に藤の川につれていかれ、先生の家での炊事や洗濯のやり方を手本に丁寧に教えられたね……。



(菅野先生)

たとえば、焼き魚の串を楽に安全な洗い方といって「水にうるかし、洗うときは、根元の方から上に、こすこと。手にとげが刺さらず、安全にできる」から。

「みかんの皮を乾燥させ取って置くこと。着物を縫い直すときは、そのまま縫い直さず、洗うこと。その時に、みかんの皮を入れて洗えば、きれいに仕上がる……」などと。

私は、長女で11人兄弟。上に兄2人、下に女6人、男2人。親は浜や畑仕事が忙しく大変だと思って、役に立たせようと教えてくれたのだと思います。

- ② 校長先生は、「教育熱心で厳しい先生だった……」。いろいろ知っていて、^{おなご}女子のことなどについても、「ああだの、こうだの」と言う。男の癖にこんなことまで知っているんだと思ったりもした……。
- ③ 教育熱心のあまり、親たちとの軋轢もあった。先生は、子供に学問を教えようと学校に来るように促す。だが、親たちは、稼ぎ手として学校を休まようとする。というようなことだった……。
- ④ 転任の時、私は18か19歳ごろだったが、教え子代表で部落の人たちと綾里の砂子浜まで、船で送って行き私は一晩泊まって来た。今でも、その大きな家が鮮明に目に浮かぶ……。

本郷の福壽庵を再建するとき、大船渡や綾里、越喜来、吉浜方面を本郷の念仏講が浄財修行をした。そのとき、その家にも行き懐かしかった……。

- ⑤ 4歳上と2歳上の兄二人は、小白浜の水上さんに泊まって、高等科に通って家に居なかった。その頃の大石の女の子は、上の学校に行く人はまれだった。

先にも述べたが、母は2年置きに4男7女を出産。長女の私は、小さいときから母の代わりに大人たちに混じって、節づくり用の鰹のさばきやスルメ釣り。父親が松磯のハラに舟をだし櫓漕ぎの特訓。畑づくりの手伝いと何でもやったから丈夫なんだろう。



(松磯周辺)

お墓参りに行けた頃は、その字を見ると先生方夫妻を思い出して懐かしさにひたったものだった……。

菅野先生夫妻の教えは、いろいろなところでためになったと思っています……。

⑥ 新沼家の墓碑の揮毫をしたのは菅野先生だ。私が嫁に来る前の昭和6年に、お前の父親が信用組合に勤めていたときに親交があつたのことだそうだ。

その2. 上野クニさん・(昭和9年度・大石小学校卒業／旧姓・石本)

平成20年7月86歳・再話著者母方の叔母

当時の大石の男の人たちが、筆字が上手だと言われたのは、菅野先生が夜学で青年たちに習字を教えたからと聞いている。

二番目の兄(大正12年卒・二郎)から聞いた話だが、最初は、青年たちの中には、仕事か学問かと反抗する者もいて、馴染まなかったようだ。

そのうちに、いろいろと学問も教える、先生の熱心な心の内が、分かってきたんだと……。

そして、尊敬の念に変わって行ったんだらうね。だから、2回目も大石に呼んだんだと思うよ……。



(本郷「^{しほく}宿」の新沼ハルさん)



(「わかた」の上野クニさん)

(4) 大石小学校修学旅行歌

作詞：古池 タケオ

大正15年頃から修学旅行は釜石へ、その際に作詞し、鉄道唱歌の曲で歌った。と記されています。



(釜石全景絵図)

① 黒煙高く大石を 早や我が船は離れたり 松ヶ島根の彼方より 昇る朝日を眺めつつ



(松島方面の日の出)

② 右は死骨の岬にて 昔ましらの住むところ
断崖高きその上に 茂る林は保安林

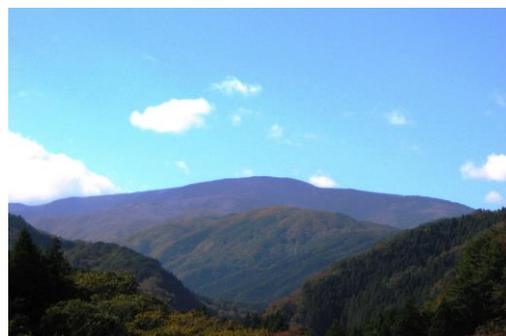
③ 左に見ゆる小白浜 唐丹役場はここにあり
三陸汽船の入港は 年々繁華を益して行く

④ 出崎の影の本郷は 海嘯前の大都会 大海嘯と山火事に 悲惨の話数 知れず

⑤ 花露辺の浜の磯づたい 見ゆる彼方の大滝
はただ隣郡の人のみは ここを境と唄うなれ



(金島・松島・蒜島)



(五葉山の遠景)

- ⑥ 五葉の山の峰続き つくる松島の岬こそ 地図にもしるし目にも 眞の境と知られける
- ⑦ 太平洋に面したる 佐須の浜はその昔 仙台領と南部領 年貢ご免の土地なりき
- ⑧ 郡境 過ぐるころ 沖は 波浪は高く 風すさぶ ホスペをかけて打ちいそぎ 釜石灣にのりこまん
- ⑨ 白浜 平田は 浦々と朝日を 受けてその さまは つごもる子等の小春日和に 日なたあぶりの その如し
- ⑩ 灣口遠く丑寅に 雲煙向うの大島は あしか かもめの産地なる 三貫島と知れける
- ⑪ 数マイル海上の 煙も晴れて アラ嬉石松原棧橋眺めつつ ストップかける東前

唐丹小史より引用



(三貫島近景)

作詞の古池タケオさんは、どなたか分かりませんが、歴史や地理などを歌にして、しかも長い船の旅を、飽きさせないように、現地を見せながら教え学ばせた事は一石二鳥の実効ある方法であったと伺えられます。

(5) 大石賛歌

林野民三郎作詞

- ① ここは大石北端の 洋々涯なき太平洋 其の名も高き大石港
- ② 六百余年の昔より 先祖に伝わる荒波の 海は吾らの住家なり
- ③ 磯部に寄せる白波と 松吹く風を
楽と聞き 吾らはここに育ちたり
- ④ 奥四ヶ浜に比類なき 歴史に輝く
理想郷 吾らの郷土神護る



(大石港周辺)

- ⑤ 東を望めば涯しなき 太平洋は四顧のうち 海の彼方は米国ぞ
- ⑥ 文化は進む日に月に 流るる潮は行きて来ず 起てよ若人国のため



(松磯・寄せる白波と松吹く風と)

作詞者の林野民三郎さんは、大石出身であり、大正9年度の卒業生です。終戦時は、陸軍航空少佐。戦争当時は、千葉県下志津陸軍飛行学校教官および「テストパイロット」の任にあり、陸軍航空隊の数少ない至宝として活躍された軍人でした。

終戦後、間もなく、任務であつた特攻隊員の教育等に責任を感じてか、割腹自殺を遂げました。……合掌



(戦闘機)

唐丹小史より引用

XII. 大石の豪商「わかた」

大石の豪商・上野與惣治、屋号・“わかた”（通称＝わかた）は、全盛時代のその昔から、侍達の用心棒を抱えていたほどの家柄でした。

商いの方は、鰹の一本釣りや鮫網、烏賊など船で獲る魚。わかめや昆布などの海草のたぐいを大量に加工していました。

そして、俵物として、舟で東北から江戸までの東海路や江戸から大阪までの南海路で運び、江戸や大阪方面に売り出していました。

名代の主人達は、慈悲ふかい人で、津波などの災害があれば、部落民の面倒を見たり、お御堂も二字建立、住職もいて、時節には部落の人に法話を聞かせたりもしていました。

家も気仙大工の匠の精を施した造作。母屋の南東の山頂には稲荷様を祀り、その山の斜面全面が路地。庭には池を設け、四十七士の槍の名人の銅像を建てられていたそうです。

往時の証しは、大正初期、盛岩寺の庫裏として移築、そのたたずまいを遺しています。「正に、往時の証し盛岩寺のあり」の感があります。



(元わかたの床の間)

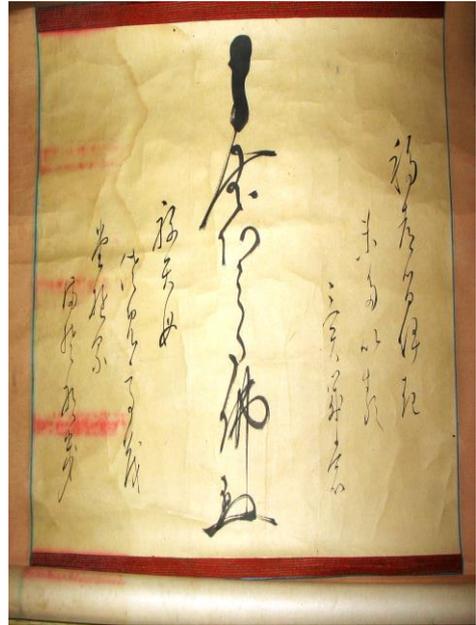
また、当時、侍達用心棒が、使用した槍やサシマタ。お御堂で住職が使用した経本や掛け軸。公家の娘で花魁だった15代当主の嫁持参の柄手鏡などが、今も、“わかた”に所蔵されています。



(槍やサシマタなど)



(お御堂で使用した経本)



(お御堂の掛軸)



(柄手鏡大小・表面と鏡面)

お御堂一字も、母屋と共に盛岩寺に移築、改築され、欄間三対と共に観音堂として、往時のたたずまいを遺しています。



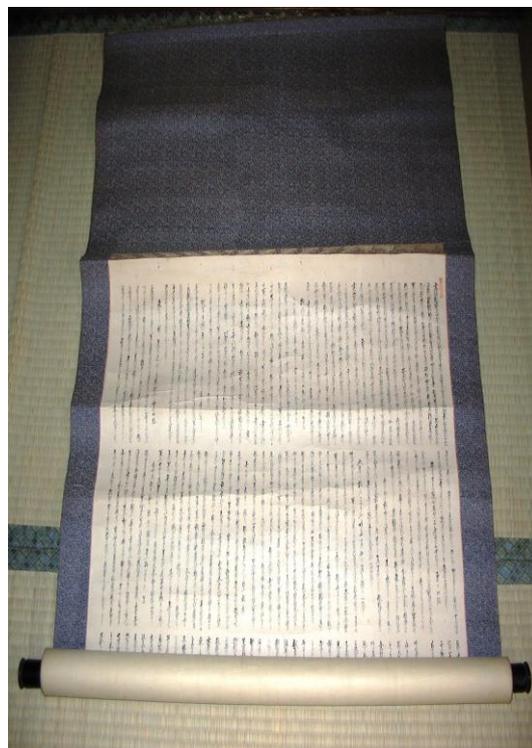
(盛岩寺・観音堂)



(盛岩寺・観音堂の欄間三対の内の左右の二つの欄間)

残り一字の証しは、欄間三対が、西光寺（15代の二女の嫁ぎ先）、大船渡博物館、わかたの親戚の屋号「茶屋」にそれぞれが保管されているそうです。

明治29年の^{だいかいしょう}大海嘯の時は、被災民への支援や援助。その功績などを東京の知人が称賛。「大きな掛け軸」にして寄贈され、これも、「わかた」に所蔵されています。



(大掛軸) →

子供達も、主人を見れば「わかたのだんなさん」だと周り集まり、腕にぶらさがったりと子供たちにも好かれ、にぎやかだったそうです。

その他にも、一例として、気仙の^{こおり}郡役所を^{さかりまち}盛町に建てるとき、樺などの材料を全部寄付。また、中尊寺にも金を献納したといわれて、方々に名の通った人たちと語られています。



(郡役場・後の盛役場)



(中尊寺)

参考の項、おわり
すべて、おわり

◎釜石の民話・第5集：大石の青島のお地蔵さん

○話し手：木村ナカさん／片岸（旧姓・上野、屋号：向・むげえ）

○聴き手：加藤ムツさん

●再話著者：新沼 裕／本郷地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影：同上

●校正指導：同上

●再話完成：平成20年7月

◎再話聴取：石本一雄さん／大石（再話著者母方の伯父）

◎〃 : 新沼ハルさん／本郷（再話著者の母）

◎〃 : 上野クニさん／大船渡（わかた・再話著者母方の叔母）

<追記>

「わかた」について、もう少し知りたい方は、唐丹の民話1・「大石の金持ち・わかた」の併読をおすすめします。

<参考・引用文献>

1. 釜石市市誌唐丹小史資料編
2. 歴史に道第2号浜街道上巻・釜石市教育委員会
3. 大海原・大石小学校閉校記念誌
4. 唐丹民話：「大石の金持ちわかた」（当会再話著書編）